

原田ゼミナール活動報告 NO. 1

海老江干潟(大阪市福島区)

淀川の下流にある海老江では毎月第2日曜日にNPO法人ゴミンゴ・ゴミ拾いネットワークが開催している清掃活動に参加し、ゴミの組成調査と清掃活動をしています。漂着ゴミは波や紫外線の影響を受け、時間が経つにつれて劣化し小さな欠片となり、回収が難しくなるだけでなく、生き物が餌と区別できずに誤食してしまい生態系に深刻な被害が出ています。

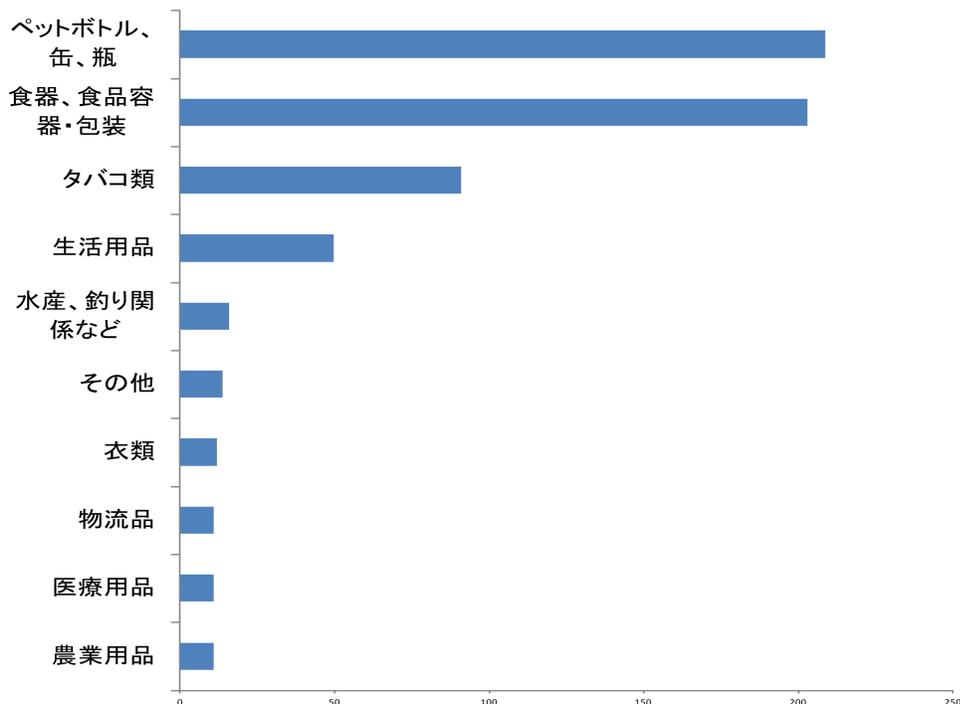
右のグラフを見て分かるように漂着ゴミは、ペットボトルや発泡スチロール片と硬質プラスチック破片が多く、その他では、花火やたばこなどがあります。

数は少ないですが、注射器などの医療器具も漂着しており、素手で触ると非常に危険です。このようなゴミを無くすためには、まずは淀川近辺に住んでいる住民のゴミに対する意識を根本から変えて、漂着ゴミ対策を国民全体で一刻も早く実行する必要があります。

海老江干潟での集合写真



2014年度 海老江における漂着ゴミ集積量 TOP10



NPO法人ゴミンゴとは

NPO法人ゴミンゴとは、関西のゴミ拾い団体の情報を一元的に集約しゴミ拾い情報のポータル団体となることを目指し活動しており、ゴミ拾いをする場を提供し、放置ごみのないきれいな社会の実現に寄与することを目的として活動しているボランティア団体です。

私たち大阪商業大学の原田ゼミナールの学生はゴミンゴの活動に参加し、企業の方や地元住民の方々、他大学のゼミ生などの人達と一緒に、ゴミのないきれいな社会を目指して活動しています。

庭窪ワンド(守口市)

かつての淀川には、イタセンバラが生息していましたが、ブルーギルやブラックバスなどの外来生物の出現とポタンウキクサやナガツルノゲイトウなどの外来水生生物の存在で水質が汚染され次第に姿を消していきました。ポタンウキクサは水面を完全に覆い尽くすまでに繁茂するため水中の光量や水中の酸素の量が減少し、冬に枯死すると水底がヘドロ化して、他の水生動植物に悪影響を与えています。

庭窪ワンドでは、イタセンバラが野生復帰ができるようにするための保護と外来生物の駆除、川の清掃活動を行っています。この活動は企業や団体の方々とも協力して活動しています。

*ワンドとは、川の本流と繋がっているか、川の増水によって川の本流とつながってしまう場所のことを指します。

庭窪ワンドでの活動の様子



イタセンバラについて

イタセンバラは産卵期の美しい姿から、淀川水系のシンボルフィッシュと呼ばれていて、1974年に魚類初の天然記念物に指定されています。全長は7~8cmあり、淀川水系に生息している魚でイシガイ科の二枚貝に産卵します。

イタセンバラは一度は姿を消しましたが、イタセンバラの野生復帰を目指した活動により、平成26年4月の稚魚確認調査でイタセンバラの稚魚が淀川の城北ワンドで確認されています。これは平成25年10月に放流されたイタセンバラの成魚から生まれた稚魚とみられており、野生の個体が確認されたのは、平成17年以来9年ぶりとなっています。この成果は今後のイタセンバラ野生復帰のため大きな第一歩と評価されています。

イタセンバラ



原田ゼミ活動報告No. 2

京都嵐山でのアンケート調査

・調査目的

このアンケートは毎年行い、年度ごとで比較するためのデータを集め、一人あたりの支払意思額を出したり、一般人が環境の深刻さについてどれだけ知っているかを調べています。

・調査内容

11月～12月にかけて嵐山を訪れる観光客が、保津川の環境を守るために、どれだけのお金を払えるか（支払意思額）や海ごみ、漂着ごみの問題についてどれだけ知っているか、デポジット制度導入の賛否を対面アンケート方式で行っています。

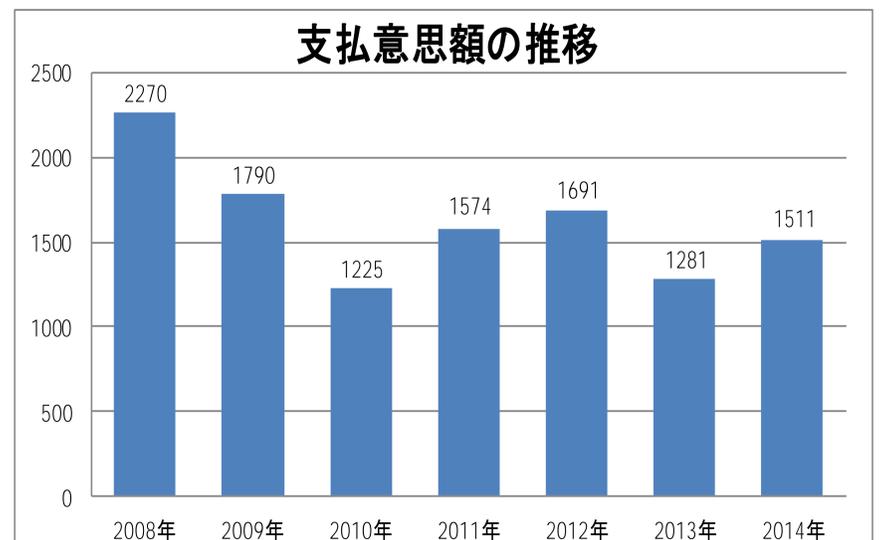
デポジット制度とは、使用した容器を返却するとお金が返ってくるシステムのことです。このデポジット制度は、アメリカやドイツなどの先進国で、導入されており飲料容器の回収率は約90%です。日本では離島やスタジアムなど、一定のまとまりある区域内での導入例があります。



(アンケートの様子)

・調査結果

2014年度のデータでは、一人当たり1511円嵐山の環境保全のため支払ってもよいという結果になり、2013年度と比較すると230円上回っています。また、2012年から2013年にかけては410円下がっています。これは消費税増税が近づいていた為だと考えられます。2010年から2012年にかけては、支払意思額が上がっています。これは2011年に起きた東日本大震災のため、一人ひとりの環境意識が高まっているのだと思われます。また、2008年から2010年にかけての支払意思額は下がっている。これはリーマンショックの影響により、大きく景気が後退したことが原因だと考えられます。



・感想

一部の学生は緊張や不安もありましたが、3年生の人たちが中心になって指導してくださったので、やっている内にだんだん慣れてきて楽しいと思うようになりました。

いろんな人のいろんな意見、考えを聞くことが出来るので、自分の知らないことを沢山学ぶことが出来ました。特にご年配の方から学ぶことが多かったです。

アンケートに答えていただいたあとに「がんばってね」と応援してくれる人もいらっしゃいました。そのような一言がとても嬉しかったです。

オンラインごみマップによる調査

オンラインごみマップとは、「どこに」「どんな」「どれくらい」のごみがあるのかを視覚的に知ってもらい、その情報を流域全体でシェアし把握することで、漂着ごみの現状を明らかにするとともに、意識の改善を図ることを目的とした活動です。ごみマップというアプリを用いてごみの量、拡散具合を調査しています。アプリ以外にもGPS機能付きのデジタルカメラも使っています。ごみの量は目視で推定し、それを20L入りの袋で換算し「ランク」として評価します。こうして得られたデータをインターネット上に蓄積していくと「どこに」「どんな」「どれくらい」のごみがあるのかが分かるようになります。

そして、今年度より2年生が新たな地域で、このオンラインごみマップの活動に取り組んでいます。場所は東花園市と大東市の2カ所です。昨年の12月に2回目となる地域の方々とのディスカッションを行いました。今回は調査対象が2カ所あるということで、地域によって前向きな意識を持つ地域とそうでない地域に分かれたことが印象的でした。



(調査の様子)



(ディスカッションの様子)